斜している。石質は凝灰岩で単独の出土である。

秋田字兎十七番地出土の石棒は、昭和四一年の土地改良の排水路工事中に二個体が出土したが伴出遺物はない。二個のうち一個は形が悪いが、大きい方は形がよく整っており全長三十二センチメートル、断面は楕円形で胴まわり七十一センチメートルである。頭部は長石の部分をうまく利用しており、胴部は花崗岩で基部が円底状を呈している。全面によく研磨されて滑らかな体面を呈し、光沢がある。小さいものは長石の部分を頭部としているが全体に傾斜した胴体をなし、花崗岩の体面が磨かれている。石棒とするにはやや不安を感ずるが、人工の手が加えられていることから参考品と考えられる。

秋田中原八十二番地出土の石棒は、昭和初年ごろ竹薮の開墾中に発見された。付近は縄文中期の遺跡があり、打製石鏃がよく採集される畑地帯である。全長二十四センチメートル、胴まわり四十三センチメートル、断面がやや楕円形をなした花崗岩製の無頭石棒で、頭部に十字状の陰刻がある。頭部と胴部はやはり、鉢巻状の陰刻によって区別する意図がうかがわれる珍しいものである。

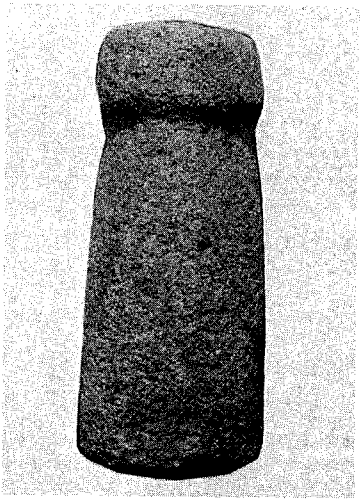


図2－17　秋田字宮浦出土の石棒

秋田字宮浦出土の石棒は、全長三十三・八センチメートルで重量十キログラムの花崗岩製である。頭部は約七センチメートルの長さで、胴径と同じ張りの頭径をなし、わずかな抉りを入れて頭部をつくり出している。全面はざらざらとした粗面である。断面は楕円形をなし、長径十四・三センチメートル短径十一・三セン

チメートル、頭頂は平らであり、基底面も平らな載切である。町内出土の石棒ではもっとも形状がととのっている。

小口の下林遺跡から出土した石棒は、縄文中期の土器を伴出しており、大口町内出土の石棒中、唯一の時期が判明している資料である。全長十八・七センチメートル、頭部は花崗岩に付着した白い長石の部分をうまく利用して亀頭状につくり出している。全面に粗雑な調整を施している素朴な小形石棒である。

第三節　弥生時代

尾張の弥生文化

尾張における弥生文化の発展は西春日井郡清州町の貝殻山貝塚や名古屋市北区西志賀貝塚にはじまる。これらの貝塚の下層から発見される多くの土器は、北九州から出土する遠賀川式土器で、弥生時代の前期に用いられたものである。この土器が、農耕技術の伝播とともに土器製作の技術と密接な関係を持つものと考えられることから、弥生文化の発展を知る手がかりともなる。縄文文化のあとをついで、まず貝殻山貝塚や西志賀貝塚を中心とする文化圏と畿内を中心とした弥生文化圏とは、ほぼ同じ時期に形成されたと考えられる。この貝殻山・西志賀文化圏の周囲には、三河を中心とする縄文文化の系統と思われる水神平式土器の文化圏であった。縄文晩期から弥生前期にかけての主な遺跡は、一宮市馬見塚遺跡、弥勒遺跡、元屋敷遺跡、大口町の西浦遺跡など、尾張では数か所が知られている。

この前期の弥生文化が発展して地方に普及し、それぞれの地域で地方色豊かな土器文化が開花する。この時期が弥生中期の第二の発展段階で、朝日式、貝田町式、外土居式、爪郷式というような形式が生まれている。このうち、古

い時期の朝日式土器を中心とする遺跡は数が少なく、朝日貝塚や西志賀貝塚によって代表され、遺跡の規模も広い。つぎの貝田町式の時期になると、遺跡の数はだんだんと増加してくる。西志賀貝塚上層、一宮市町屋遺跡、岩倉市東町畑遺跡、大地遺跡、犬山市上野遺跡、大口町東樋田遺跡などがあり、その中心は尾張と美濃にある。この時期は、稲作農耕が一般化した時期で、大形壺、細頸壺、深鉢、甕などの土器群のほかに、稲の穂摘具である石包丁とか、スキ・クワなどの木製農耕具類が使われ、当時の農業形態が推察できる。これらの木器の切り口や加工面には、鋭い刃物による痕跡がみられ、金属器の使用がうかがい知られる。また、金属器が普及するにつれて、石器類が除々に姿を消していった。

中期末は、長床式とよばれる土器型式に統一される時期で、文化圏がいっそう拡大され遺跡の数も飛躍的に増加する。主な遺跡には、名古屋市高蔵貝塚、西春日井郡朝日貝塚、二反地遺跡、春日井市南東山遺跡、犬山市上野遺跡などがある。

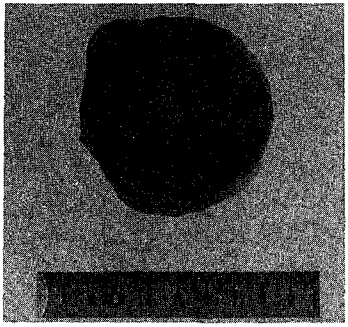


図2—18
東樋田遺跡出土の籾痕のある土器

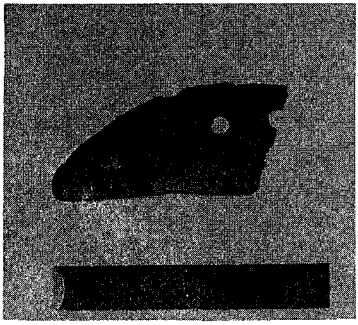
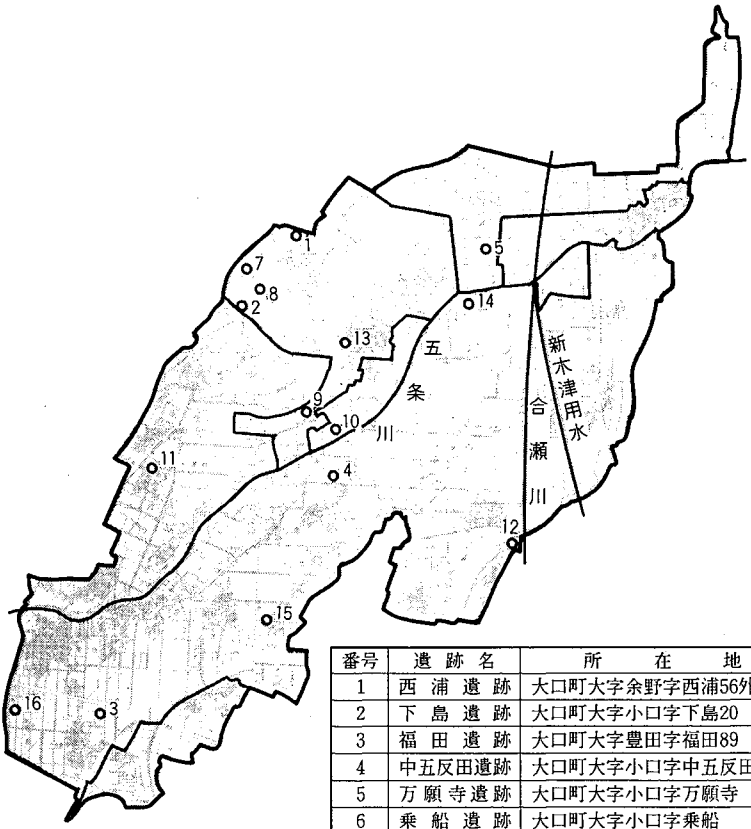


図2—19
中五反田遺跡出土の包丁

後期になると尾張平野や伊勢湾沿岸一帯に展開した文化が、共通した様相を呈して地域文化が統一された時期にあたり、遺跡の数がもっとも多く、集落や人口の増加、生産力の向上をうかがうことができ、弥生文化が大発展をしたことが、大口町内の遺跡分布からも知ることができよう。



番号	遺跡名	所在地
1	西浦遺跡	大口町大字余野字西浦56外
2	下島遺跡	大口町大字小口字下島20
3	福田遺跡	大口町大字豊田字福田89
4	中五反田遺跡	大口町大字小口字中五反田
5	万願寺遺跡	大口町大字小口字万願寺
6	乗船遺跡	大口町大字小口字乗船
7	清水遺跡	大口町大字小口字清水
8	日高遺跡	大口町大字小口字日高
9	植松遺跡	大口町大字小口字植松
10	東樋田遺跡	大口町大字小口字東樋田
11	大御堂遺跡	大口町大字大屋敷字大御堂86外
12	神明社遺跡	大口町大字外坪字宮前341
13	仁所野遺跡	大口町大字小口字仁所野61外
14	向江遺跡	大口町大字小口字向江
15	南山遺跡	大口町大字秋田字南山31の4
16	白木遺跡	大口町大字豊田字白木126外

図2－20　弥生時代の遺跡分布図

弥生のムラの発展

大口町における弥生時代の遺跡は数が多く、規模もさまざまである。

弥生前期の遺跡は、余野の西浦遺跡、小口の下島遺跡、豊田の福田遺跡の三か所がある。範囲はいずれも小規模で、生活基盤となるような低湿地を近辺に控えている。西浦遺跡の場合は、現地点からみれば見当たらないようであるが、垣田の西、水瀬のあたりから低い旧河道の痕跡がうかがえる。

中期になると遺跡の規模も大きくなり、その立地も、稲作に適した低地の広がったところや、住居に適した自然堤防州を選んでいる。余野字清水から日高にかけては、かなり広い地域に住居址があり、農作業に伴ってしばしば土器が発見され、大口町内における最大のムラが存在したことを裏付けている。また下島から竹田に至る間には、中期末葉から古墳時代にかけての遺物が散布し、ムラの所在が推察される。

小口の中五反田、新田前、万願寺、東樋田付近にも、数軒の小さなムラの存在がうかがわれる。東樋田遺跡では、住居址二戸や炉址が確認され、籾痕のある土器も発見されるなど農耕を主とした共同体のムラの一端がうかがわれる。水田は、自然の流水を利用し得る低地がムラの近辺に見られる。

前期にくらべ小さいながらもムラの数は増し、生活の舞台は、つぎつぎと広げられて開発が進み、人口も増加していったことだろう。

これらのムラは、たがいに密接な交渉をもっていたことが、日常生活に使用する土器の型式や文様からもうかがい知ることができる。

また、近畿地方では、弥生時代の中ごろ、異常な争乱状態が発生したために、平野部のムラと近辺の山の中腹や山頂に遺跡を残した例が多く、争乱の際の避難所的な性格をもったものとみられ、高地性遺跡の名で呼ばれている。こ

のことと関連があるかどうかは不明だが、春日井市や知多市にもこの種の遺跡がみられる。

町内の各所で時折、弥生中期の土器が発見される。遺跡とか住居址でなく、焚火のあとに土器が一個～二個ほどである。秋田字下庭森では貝田町式の甕一個、仁所野の畑からやはり貝田町式の細頸壺一個、豊田字霞野で条痕文土器二個体分と焚火あと、大屋敷字上大塚では焚火あとと甕一個体分などが発見されている。また土器は散布せずに打製石鏃が多く採集されるなど謎が考えられる。

後期になると遺跡の数はさらに増加し、上小口の万願寺、中小口の下山伏・馬場、宮之前、向江、北屋敷、仁所野外坪巾上の神明社境内、豊田の白木、小皿、秋田の西郷前、南山などに分布しているが、とくに大規模なのは、余野の垣田住宅の西、水瀬、西浦付近から清水、日高、神明下、中畑、田代西一帯、下島から竹田、大御堂に至るほぼ全域に遺物の散布がみられる。これらの遺跡は、自然堤防州の微高地に住居を構え、隣接する低地のとくに水利のよい場所を生産の基盤として、稲作農耕に従事したものと考えられる。中期にくらべ遺跡の数も範囲も増大したことは、まず人口の増加があり、生産手段や道具などからより生産力を増し、生活能力の向上が考えられよう。

この後期のムラは、余野から下島、大御堂、東郷に至る地域がつぎの古墳時代にまで引きつがれていったのである。

東樋田のムラ

小口字東樋田は、同興紡の東百メートルで役場の南東前面に広がった水田地帯にある。ここからは、大型の礫器、短冊形打製石斧、打製石鏃、磨製石鏃、石ノミ、石キリ、凹石、スリ石、獣足状の土製品、貝田町式土器、外土居式土器、長床式土器、寄道式土器などが出土し、中でも石鏃の数が多い。このほか住居址、炉址、溝状遺跡なども発見されていたが、調査されぬまに消滅してしまった。とくに貝田町式の深鉢形土器は、あらい条痕で器面を整え、口縁部の内側に櫛目列点文をめぐらし、底面に布目痕が残されている。弥生中期に

はすでに布があったことを証明する一例で、布の織り方は縦糸と横糸を交互に組んだ平織りの目があらいものである。またこの種の土器は、黒くすすけて煮沸に使用した痕跡をとどめている。

壺形土器では、広口壺や細頸壺の二種類があり、胴部の文様に外土居式の標式的文様である重列磨消線文や、貝田町の壺形土器に丁字文がみられるなど、名古屋市を中心とする土器文化の波及を受けていたことがわかる。

大口町における弥生中期のムラは、大規模なものでなく、数戸を単位とした小さなものが点在していたといえよう。

中五反田遺跡

小口字中五反田で、同興紡の南東約三百メートルにある。この遺跡は、弥生中期の貝田町式や外土居式を主とした地点と、後期の寄道式や欠山式の土器を出土する地点があった。出土した土器は、高杯や壺、甕などと打製石斧、扁平片刃石斧、磨製石鏃、石きり、石皿、凹石、石包丁、石錘、打製石鏃など多彩な出土品がみられる。遺跡の立地は、水田に囲まれた島畑状の微高地で、古くから土器片が採集されていた。

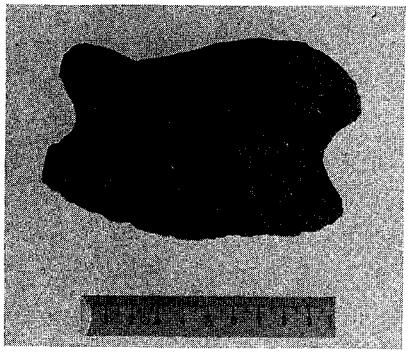


図2－21　中五反田遺跡出土の石錘

遺跡の性格は、出土遺物の種類が多く、土器も弥生中期中葉から後期末までにおよんでいるなど、住居址の存在を裏付けているが、未調査のまま壊されてしまった。農耕技術の一般化によって中五反田のムラの人々も、コメ作りと採集、狩猟、漁撈を中心にした生活を営んだと考えられ、水田は南側に広がる帯状の一段と低い地域だったとみられる。この水田は、とくに水利がよく低湿で当時としては格好の場所だったと考えられ、綿密な発掘調査をすれば、木製の生活器具や農耕具の発見も期待できる場所であった。

出土品のなかで、磨製石鏃は、扁平でやや反りがあり、全長二・三センチメートル、最大幅一センチメートル、厚さ二・二ミリメートルの大きさである。形態は逆ハート形の無茎で穿孔はなく、表裏ともよく磨かれ、側縁に斜めの磨き痕が面として残った、スレート質の石で作られている。この種の磨製は少なく、隣接する東樋田遺跡に一例みられる。

石製の大工道具

弥生時代前期、中期においては、石器の占有率が大きかった。しかし後期になって鉄製の道具が使用されるようになると、効率の低い石器は除々に姿を消していった。

ここでは、弥生時代の出土品のなかから、特徴のある石製道具をみてみよう。

「石製工具」　弥生時代を特徴づける大型蛤刃石斧、柱状片刃石斧、扁平片刃石斧などがある。これらは、木工用の道具として使われたものである。大型蛤刃石斧は、刃がハマグリの形に似ていることから名づけられたが、この刃は鋭利でなく、重さの衝撃で木を切ったり、打ち割ったりしたものである。仁所野、中五反田、余野などから数本が出土している。

「柱状片刃石斧」　別名抉入石斧ともいい、スキやクワのように柄をつけるため、刃の背面に抉りをつけ、木の枝のまたの部分を利用して、大工道具のチョウナに似た形状をし、木をえぐったり、穴をあけたりするに使用したものである。仁所野出土の片刃石斧は、全長一八・四センチメートル、幅四センチメートル、厚さ三・五センチメートルの硬質班砿岩製で、明瞭な使用痕は認められない。その所属時期は、伴出遺物がないために不明である。

「扁平片刃石斧」　小形のものが中五反田遺跡や東樋田遺跡で発見されている。この石斧は、木の面を削ったり、えぐったりする石斧で、硬質の水成岩を用い、ノミの刃のように一方を擦って刃をつけている。

これらの三種の石斧は、弥生時代の工具の代表的なもので、その系譜は、大陸に求められ、弥生人の大工道具として木材加工の用に供したものである。

「石錐」　木や布・皮などに穴をあける打製の道具である。余野、東樋田、中五反田、北替地、中原などで採集されている。

「石包丁」　稲の穂摘み用としての石製の道具が、中五反田、東樋田、向江などの遺跡から出土している。石包丁は磨製と打製があるが、町内の出土品はすべて磨製であり、穿孔具を回転させ両面から円孔を二つあけている。この二つの円孔は、たがいにひもをわたし通しをし、そのひもを指にかけて穂を摘み取るのであるが、鉄製の鎌が普及するまで、使われ、稲作が行われたことを証明する石器として注目される道具である。石包丁で摘まれた穂は束ねて貯蔵し、必要に応じて脱穀したと考えられる。稲わらは、いろいろの用途が考え出されるまではそのままで、除々に根刈りに移っていったと思われる。おそらく鉄製の鎌が使われるようになってからであろう。

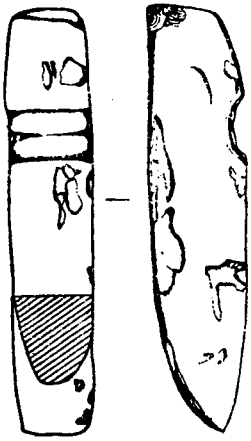


図2－22
仁所野出土の柱状片刃石斧

「石斧」　縄文時代からの伝統的な農具として使用され、大小さまざまな形態が生み出された。大きさは数センチから二十五センチメートル前後までで、短冊型、撥型、分胴型、鉞型などがあり、磨製と打製の両者がある。町内では短冊型の打製が圧倒的に多い。垣田遺跡出土の例は、長さ十七センチメートル、幅十六センチメートルのように変形で大型の打製石斧もみられる。

このような石斧は、尾張北部でもっとも多く二百本近くが採集、保管されている。大部分は土掘り用の道具であったとみられる。

「石錘」　漁網の錘具として土錘とともによく使用されたものである。石錘の大形のものは扁平で形の整った石の両端を打ち欠き、長めの紐をつけ、狙った得物をめがけてぐるぐると回転させながら反動をつけて投げる投弾の役目をするという機能を推考した研究もみられるが、多くは漁具として使用されたものである。扶桑町から大口町にかけては、幾筋もの不規則な流れがあったとみられ、漁法の一端がうかがえる。

向江遺跡の竪穴式住居

小口字向江地内で五条川にかけられた六部橋の南東一帯に広がって住居址群がある。耕地整理によって発見され緊急調査の結果検出された遺構は、竪穴式住居址二、粘土の堆積遺構、溝状遺構などであり、出土した遺物は、壺形土器、甕形土器、高杯形土器、蓋形土器、小形土器、打製石鏃、石包丁、短冊形打製石斧、撥形打製石斧、鉞形打製石斧、砥石、凹石、敲石などである。これらの年代はいずれも弥生時代後期に位置づけられる。

第一号竪穴式住居址は、床面上に層をなした灰や炭化物から火事の災禍に遭遇したものであった。住居址の構造は隅丸方形で周壁は四方にみられる。壁下には浅い周溝がめぐらされ、その一端は西壁の中央部で溝状遺構に接続していた。住居址としての主柱の配置をみると、主柱の位置が不揃いであり、配置に適正さを欠いている点で問題がある。また炉址はほぼ中央にあって、楕円形の石が横に置かれ、貯蔵穴も備えていた。この貯蔵穴の南縁には大きな粘土塊が置かれ、また隣接した溝状遺構の中にも良質の粘土塊が意図的に置かれたなど、土器製作の工房址の可能性も考えられよう。

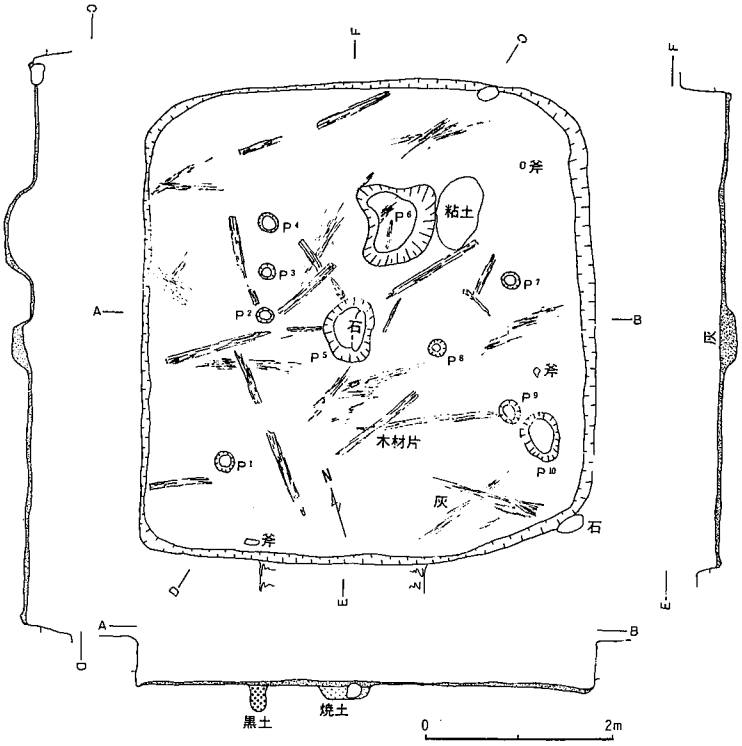


図2—23　向江遺跡の住居址

住居址の床面の形状は隅丸の正方形をなし、弥生後期の寄道式土器が床面上や貯蔵穴の中から発見されるなどから、第一号住居址は寄道期のものと考えられる。

第二号住居址は、第一号住居址とほぼ同じ規模とみられるが、竪穴の隅が確認されていないために隅丸方形か長方形かはさだかでない。周壁や周溝、主炉址と副炉址などがあった。床面から出土した土器類は、第一号住居址よりやや古式のもので、寄道式の古式に随伴した煮沸用の条痕文土器に特色がみられる。従来この条痕文土器は、中期に盛行するものであるが、尾張平野の東北部では後期前半まで残り、はなはだしいのは、退化した条痕文が欠山期まで残った例もある。

溝状遺構は排水溝と考えられる。住居址

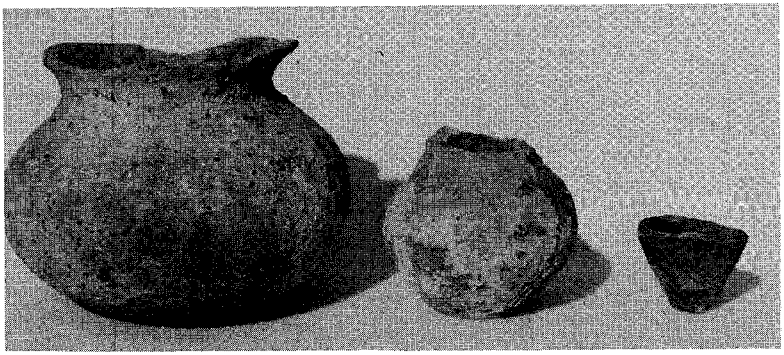


図2—24　向江遺跡出土の小型土器

の南西部がやや低く、第二号住居址の西方約三十メートルでは、六十～七十センチメートル低くなるなどから、降雨量が多い場合の排水には当を得ている遺構である。溝の底面近くの土質は極細粒で構成されていることからも、濁水の沈澱によるものと考えられる。

土器は大半が無文であり、前形式である中期の長床式の残映をみる広口短頸壺や最大胴径が下胴部にくる壺形土器もみられる。向江遺跡の主体をなすのは寄道式であり、出土量は壺形土器、高杯形土器、甕形土器の順であるが土器の遺存状況は極めて悪く、文様の剝落が顕著であるため、施文についての所見は十分でないが、パレス・スタイル(宮庭式土器)の土器にみる朱彩と刺突文を施した壺形土器などもある。また粗雑なつくりの小形土器は、実用性に乏しく祭祀的性格をもったものであろう。溝状遺構や粘土塊、小範囲から多く出土した石器で鉄製利器の存在を示す五点の砥石、また石鏃、石斧、石包丁など、生産性を示唆する遺物がみられる。これらのことから本遺跡を形成した集団は、やや特殊な性格をもったものではなかったかと考えられる。

清水遺跡　余野一帯は、犬山城を起点とする犬山扇状地のほぼ中央部にあたり、自然堤防洲と低湿地が交互に並列する地帯で、古来、弥生式土器、須恵器、土師器、甕器などの遺物が多く発見される地点として注目され

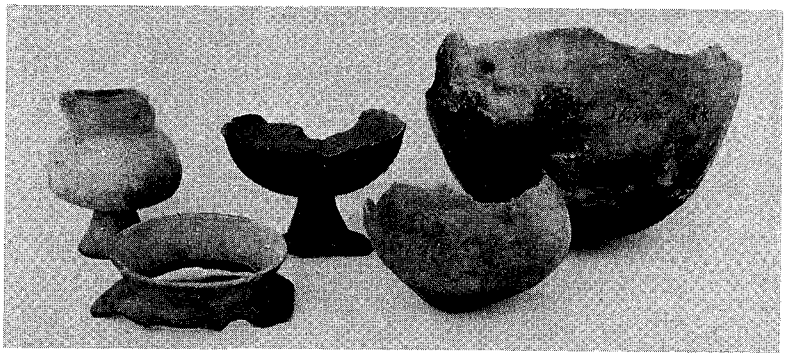


図2—25　清水遺跡出土の土器

てきた。

現在、人家が密集しているあたりから周囲に広がる畑地までの広い範囲にまたがっている。古くは、縄文時代晩期から、連綿として生活の舞台となり今日に至っているが、尾張平野の東北部では、犬山市上野遺跡とともに二大文化圏を形成していた。上野遺跡は弥生中期後葉に大集落が、余野の清水遺跡で代表される一帯は、弥生後期を中心とする大集落があった。余野最古の土器は、西浦遺跡出土の縄文時代晩期に位置づけられる粗製土器や凸帯文のある土器、沈線分や網状文をもった精製土器、弥生時代前期の遠賀川式土器などである。また神明下の地下三メートル未満の深さから出土した粗製土器などもみられる。

しかし、弥生中期の後半に至るまでの空白はあるが、畿内から伝播した櫛目文の地域型式である長床式土器の時期に、ムラの規模が増大しはじめたとみられる。清水遺跡周辺の集落は、弥生後期末から古墳時代にかけての時期である。昭和三八年の発掘調査で、六戸の住居址が確認されていることからも、想像以上に戸数は多いとみられる。

つぎに、この遺跡のもつ性格の一端をうかがってみよう。発掘調査の折、扁平な円板状の土製紡錘車が出土した。直径四・三センチメートル、厚さ四・五ミリメートルで中央に孔が穿たれている。これは当時新しく大陸から伝えられ

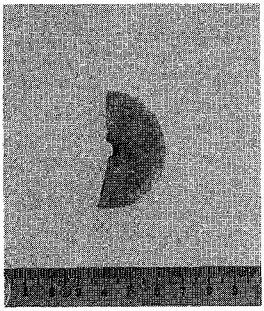


図2—26
清水遺跡出土の紡錘車

た機織りの技術で、麻やこうぞなどの繊維を撚って糸を紡いでゆく道具として用いられたものである。弥生時代の布は、中五反田遺跡や東樋田遺跡出土の土器の底面に、手織りの布痕が残されていることや「魏志倭人伝」の中に服装について、「男の衣類は横幅、婦人の衣類は単被（たんひ）のごとく、その中央を穿ち、頭を貫いてこれを着る。」と記されている。また、登呂遺跡からも地機のおさ、たていとまき、よこいとうちなどの木製の機織道具が出土しているなど、布織りの仕事が生まれ、女性の仕事としての分化がなされた。

清水遺跡の弥生人は、当時誰でも容易に入手できない小型の彷製（ぼうせい）鏡を持っていたことが注目される。この鏡は、中国の鏡をまねて日本で作られた数少い貴重品である。鏡を所持した人の地位はどうだったか、ムラを支配する首長であったか、祭祀にたずさわる人であったろうか。鏡は単なる化粧具でなく、神秘性が宿った呪術的なもの、宝器的なものとして、保持されたと考えられることから、これを日常生活や原始宗教にどう扱ったかなど、東海地方で唯一のこの鏡は、多くの問題を将来に残し、かつ清水遺跡のあり方を考えさせられる。

余野字神明下から出土した小型銅鐸は、前述の銅鏡の出土地点から東方へ約三百二十メートルの位置で発見されている。この位置は遺跡の東端に近く、西側に低湿地が南北にのびる東側の自然堤防州上である。この小銅鐸も集団共有の祭器として祭りに使われたとみられるが、各地にみられる大型の銅鐸と異なり、銅鐸のなかでも最小の部類にはいる。もともと銅鐸はなぞの青銅器で、用途や本質は想像の域を脱し得ないが、農耕に関する水や土地など農耕儀礼に関連したとする考え方が多い。

このように二つの青銅器を入手し得た余野の弥生のムラは、近辺にみられない内容を誇っている。どこからどのように入手し、だれが保有したか、ムラの構成はどうかなど問題は多く残される。

大御堂遺跡　大御堂遺跡は大屋敷字大御堂にあって、昭和三八年二月に発掘調査された。調査地点は砂質の耕土が二十～四十センチメートルほど堆積し、この下部に細砂層、微砂層の順で堆積している。床面までの深さは約一メートルで、床面に深さ約二十センチメートル掘り込んだ楕円形の竪穴遺構が検出された。この遺構の内部には大きな河原石や小さな円礫が半分ほど埋められたり、置かれたりした状態で不規則にみられた。しかし、これは後世の耕作によって原位置が動いたり、他の石が抜き取られたりして原初の様子は明らかでない。また遺構内に、柱穴らしいものは発見できず、三個の大きい石が焼けていたり、灰が堆積していたのみである。この遺構は、住居址とするには、必要な条件を欠き、解釈に苦しむものであるが強いていえば、屋外用の炊事場所と考えられよう。

出土した土器は、器形を復元し得るものはなく、細片ばかりであった。

壺形土器は口縁部の形状や文様、胎土、焼成などから三種類に分類され、中には宮庭式土器といわれる朱彩を施したものもみられる。

甕形土器は口縁部に刻目をつけたり、器面に条痕を施したもの、ヘラ調製のもの、あるいは脚台を付けた例などがある。

高杯形土器は、淡黄色の色調を呈し、杯部の浅いもの、口縁部に波文を施したものなどがある。脚部は、下方へうつるに従って裾部がわずかにちぢまり、脚の下部に三個の円孔をうかがっている。

このほか、遺跡付近で採集された若干の土器類があるが、いずれも弥生文化後期末の寄道式から欠山式に至る時期

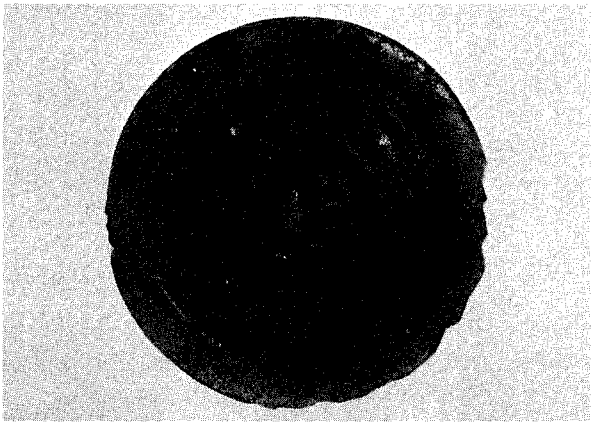


図2—27　清水遺跡出土の弥生系小型銅鏡

の所産になるものである。(いちのみや考古No.6 大御堂遺跡発掘調査報告)

弥生の銅鏡

余野字清水で出土した弥生系の小型銅鏡は、面径七・四センチメートルのほぼ正円をしており、全面に歪みがみられる。鏡面の縁は高く、中央部が低い凹面鏡のようで、その面に凹凸があり、青緑色を呈している。背面は暗黒色で、縁辺に緑青が浮いている。銅質は欠落した部分の観察からも良質とはいえない。鏡背は鋳上りの不出来や手磨れのためか文様も判然としない部分もあって、全体に明確さを欠いている。背文の構成をみると、外縁は平縁で幅九ミリメートル、厚さ二ミリメートル、縁辺に発見時の新しい欠損部分が十か所あまりある。平縁に続いて長さ三ミリメートルの直行した櫛歯文が九十八本でほぼ等間隔にめぐらされている。内区は四個の素乳を配しているもののその間隔はややずれている。素乳の間には四個の朦朧とした十字形状の文様がみられ、その内側は不揃いの五弧の内行花文である。鈕は高さ六ミリメートル、丸味をおびた板状で孔が大きく開き、孔縁も丸味がある。

この小型の銅鏡は日本で作られた彷製鏡で、分布の中心は九州の西北部にあるが、島根、岡山、兵庫、大阪、香川、石川、東京などに類例がみられ、東海地方では唯一のものである。全国の出土数は、四十二例であり、半数の二十一例が墓の副葬品、のこりが土器の包含層や単なる散布地である。この鏡も、大口町の町道新設予定路線内にあたる地

域を発掘調査していた調査団が、検出した弥生後期末の住居址に隣接した地点で発見されたもので、おそらく、古来幾度となく繰り返されてきた耕作によって、住居址または、遺物包含層から浮き出したものと推察される。

銅　鐸

弥生文化の特色は鉄器や青銅器などの金属器の使用であるが、とりわけ銅鐸は、祭祀信仰的な用途が考えられている。現在三百五十個余の存在が知られており、中部地方に出土例が多く、近畿地方を中心とする銅鐸文化圏を形成している。これに対し、北九州を中心とする銅剣、銅鉾文化圏があるが、近年の調査によって新発見が相つぎ、それらの文化圏の拡大によって考え方の修正が検討されるようになってきた。

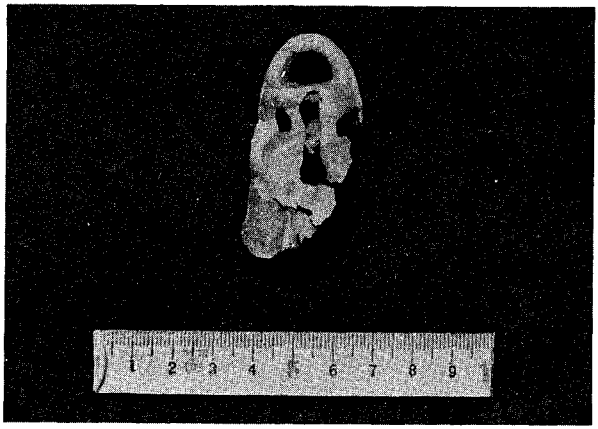


図2—28　余野出土の銅鐸

銅鐸の出土地は、村を見おろす小高い岡とか、山の斜面、大石のそびえる付近などあまり人目につかない場所で発見されることが多い。大きさは、小さいもので十センチメートル前後、大きいものは一・三メートル余りのものまであるが、概して小形銅鐸からしだいに大型銅鐸へと変化していく。中には、まれに青銅の小棒の舌が伴うものや、内面に鳴音を発するように凸帯がめぐっているものもみられる。このようなことから鳴る銅鐸とよばれる。大型のものは、据え置いて見る銅鐸などという考え方もある。これらの銅鐸は、鈕の形から菱環鈕式、外縁付鈕式、扁平鈕式、突線鈕式と分けられ、変化の指標とされる。

余野の小銅鐸は、余野字神明下八十一番地の地下約九十センチメート

ルから弥生時代後期の寄道式土器片をともなって出土した。発見の動機は、昭和五一年六月、付近の雑草を埋めるための穴が掘り込まれたとき、隅然剣先がスコップの先端に当り、発見されたものである。出土した位置は、特別の施設や遺構はみられず、砂質土の中に埋れていた。

銅鐸は、高さ五・六センチメートル、鈕高一・三センチメートル、鐸身四・三センチメートル、厚さ一・三ミリメートルで、裾の部分を欠失している。鐸身は発見のときについた大きな傷がついて、青く誘びた部分が剝離し、アカガネ色に光っている。おそらく鋳造時は黄金色に光っていい知れぬ美しさであったろう。この銅鐸に文様を認められず鏽もない。身の一方は、大半が欠失し、上部に型持ち孔の痕が二か所にみられる。反面はほぼ残り、上部中央の三か所に型持ち孔がある。内部は裾から五ミリメートルの高さの位置に、ごくわずかな盛り上がりを残した幅約一・二ミリメートルほどの凸帯がめぐっている。

この小銅鐸は、余野の原始集落の祭祀品として使用されたものであろう。

表2―3　尾張出土の銅鐸一覧表

No.	名称	形式	高さ cm	出土地	所蔵	出土年
1	二ノ宮一号銅鐸	扁平鈕四区袈裟襷文	三三・六	犬山市二ノ宮		嘉永二一年以前
2	二ノ宮二号銅鐸	扁平鈕四区袈裟襷文	三〇・三	犬山市二ノ宮		
3	外山銅鐸	外縁鈕一式四区袈裟襷文	三六	小牧市北外山南屋敷	外山神社	大正四年
4	神領一号銅鐸	突線鈕三式六区袈裟襷文三遠式	五四	春日井市神領町屋敷田	貴船神社	安政五年

5	神領二号銅鐸	突線鈕三式六区袈裟襷文三遠式		春日井市神領町屋敷田		
6	伝愛知郡銅鐸	扁平鈕式全面一区流水文		愛知郡		
7	名古屋城濠銅鐸	突線鐸式近畿式	一〇六	名古屋市名古屋城濠		
8	丸根銅鐸	突線鈕三式六区袈裟襷文三遠式	八五	名古屋市瑞穂区丸根町	辰馬悦蔵	明治三年
9	鳴海海底銅鐸	突線鈕式近畿式		名古屋市緑区鳴海付近		
10	伝春日井郡銅鐸					
11	余野銅鐸	小型銅鐸	五・六	丹羽郡大口町余野神明下	宮川芳照	昭和五一年

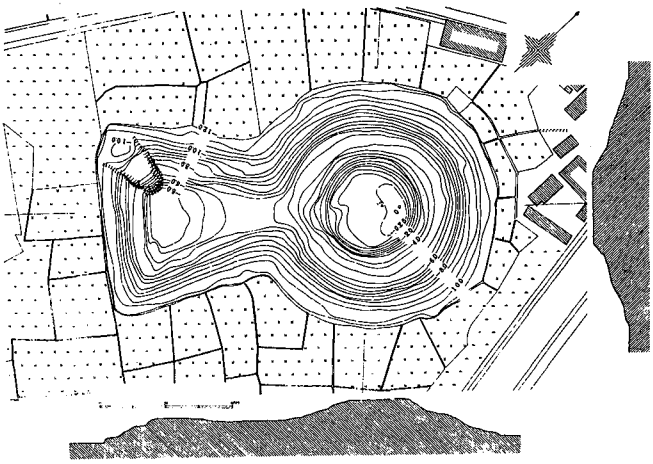
（三河部では二十四個出土している）

第四節　古墳時代

尾張の古墳

古墳時代前期の古墳は数が少なくまた、古い時期のものは平野を見下すような丘陵の縁辺や台地の端など、自然の地形を利用しながら円形、方形、前方後円形などの形状に整えて土盛りをし、長さが数十メートルから二百数十メートルに及ぶ古墳を造営している。遺体を埋めるために小さい割石を小口積みにして四方を囲い、石室を設けている。その中には割竹形の長大な木棺や箱形棺をおき遺体を入れて、棺の内外に多くの銅鏡や玉類、剣などを副葬しているが、この副葬品は宝器や呪術的な性格をもったものである。

愛知県下におけるこのような前期の古墳は、四世紀後半ごろに造営されたと考えられる犬山市白山平山の頂上にあ



（「重要遺跡指定促進調査報告」より）

図2—29　青塚古墳実測図

る東之宮古墳である。成田山名古屋別院の裏山にあたり、全長約七十八メートル、主軸を東西にとった前方後方墳である。この古墳の竪穴式石室からは銅鏡十一面、合子、釧、鍬形石、車輪石、勾玉、管玉、剣、刀、槍、斧、針、鏃などの豊富な副葬品を出土した。中でも銅鏡は中国からの舶載とみられる三角縁神獣鏡五面と、日本で製作された彷製鏡六面がある。舶載鏡の天王日月唐草文帯二神二獣鏡は、七面の同じ型から作られた同範鏡が知られていたが、東之宮古墳の出土例によって八面となり、日本の主要な古墳とのつながりが明らかにされ、その地位の高さをうかがわせる。また、日本では新発見の吾作銘重列二神二獣鏡がある。碧玉製の鍬形石もその分布が美濃から加賀に至る範囲であったものが、尾張まで広げられたなど古墳のもつ意義は大きい。本町の東辺にある青塚古墳と同じくこのような古墳の主は、尾張平野北部の開発の要となる地位と考えられ、当時の支配者邇波県主に関係ある古墳で、尾北の一大勢力としながらも大和朝廷下の一地方の首長としての地位を確保していたものであろう。